

# 18世紀から19世紀の時代に女性解放を求めた ドイツの女流作家たち：序

松 永 知 子

Deutsche Schriftstellerinnen, die sich im 18. und 19. Jahrhundert  
um die Frauenemanzipation bemüht haben : Vorrede

Tomoko Matsunaga

## 1.

いつの時代でも自己表現を求めて、男性も女性もものを書き、それは書き残され、後世へと伝えられていった。ところが、どうしたことかドイツ文学史に登場するのは、圧倒的多数で男性作家である。もしかしたら女性はものを書かなかったのであろうか、と疑いさえするほどであるが、もちろん、男性ほどの数でないにしても、ものを書く女性はいつも存在していたのである。それなのに、文学史記述の際に無視され続けてきたというのが事実であった。何故無視されてしまったのであろうか。美学的価値から判断して、低いとみなされているからであろうか。文学的天才のみを記述する文学史のなかではそうかもしれない。男性のなかには天才がいたが、女性にはいなかったというのも事実であるのだから。

しかし、歴史とはおうおうにして勝利者の立場から見られ、記述された歴史といわれているのも事実であり、文学史においても同じことが言えるのではなかろうか。男性優位の社会のなかで、男性のつくったものさしからすべてが取捨選択されてきたために、女性の側から見られ、書かれたものが見捨てられてきたということはないであろうか。

こうした疑問に答えるために、この辺で一度立場を変えてみて、女性の

側から文学史を見直してみようという研究が、近年活発に行われている。そうした研究の一つとして、ハンスユルゲン・プリンの編集した「女性解放と文学」は、長年の間日の目を浴びずに図書館の限で眠っていた女性たちをリストに載せ、彼女たちの文化への貢献を是認しようと、問題を提起している。私の以下のレポートもこれによるところが多である。

## 2.

18世紀啓蒙思想の現われる以前のヨーロッパは、キリスト教によって支配されており、聖書によれば、神が己れの似姿として造ったのはアダム(男性)であり、イヴ(女性)はあとからアダムのあばら骨から造られている。そして、この副次的存在であるイヴがアダムをそそのかせて墮落させ、二人は楽園を追われるのである。それ故、中世の宗教学においては、この罪深き性である女性はそもそも人類であるのか否かという議論さえ、まじめにとりあげられてきたのであった。

しかし、このような議論は、啓蒙主義の時代にはさすがに影が薄くなった。人間の理性と悟性を最後のよりどころとし、世界を合理的に改善しようとして、あらゆる領域にわたって人間の無知と未成熟とを啓蒙しようとするこの運動のなかで、女性側からも教養を求める動きがはじまった。啓蒙思想家にとっての望ましい女性像というものも、教養があり、学識豊かな女性であったのだが、それは夫の会話の相手として、ならびに子供たちの教育に携わる者として、男性側からみても望ましかったからであって、完全に同等の者とみなす考えからは、まだ少し距離があった。

「学識豊かな女性」の弁護者として、啓蒙主義の文学論を掲げ当時のドイツ文学界に君臨しつづけたライプツィヒ大学の詩学教授であったゴットシュェット(1700—66)が、第一に挙げられる。彼は、女性も文学を創造するようにと積極的に勧め、彼の励ましによってかなり多くの女性が創作を

した。彼の妻の、ルイーゼ・アーデルグンデ・ヴィクトリー (1713-62) もそのような女性の一人だった。彼女はまさに教養豊かで、詩才にも恵まれ、フランス古典主義作家のドラマの翻訳をしたりして、夫の文学論を支えたよき協力者であった。彼女は、家事も完璧にこなしたうえに、さらに、忙しい夫に代わって、手紙の代筆を任せられ、多くの学者からの手紙にも立派に答えていたという。

さらに、このような女性の一人として、クリスティアーナ・マリアーナ・フォン・ツィーグラ (1695-1760) がいる。彼女は、ゴットシェットの主宰する「ドイツ文学会」(Dentsche Gesellschaft)の最初の女性会員であってその会で、「学問を志すことは女性に許されているか否か」というテーマで演説も行っている。そのなかで、彼女は、女性が書くことにおいて男性より劣っているのは、女性には学校教育がなされていないせいであると、主張している。彼女は、1733年に大学から詩人の栄冠を授けられた最初の女性でもあるのだが、まだまだ、彼女の榮譽を皮肉の聲があとを断たない時代であったのだ。(注1)

ツィーグラの存在によって大きな刺激を与えられ、詩作を志した女性に、ズイドニア・ヘドヴィク・ツォイネマン (1714-40) がいる。彼女は、ツィーグラよりももっと強烈に自己主張をつづけた女性であった。自分の目で世界を見るために、男装で馬にまたがって一人で旅行したりした。このようなことは、当時の女性には許されない行動だったのだが、男性に依存することを嫌って、結婚しなかった女性にしてできたことだったのだ。彼女は不幸にも、このような旅の途中での落馬で早死にしている。彼女の詩的な野心と独立心の旺盛さは周囲のひんしゅくを買ったほどであるが、詩才は認められて、1738年にゲッティンゲン大学から皇帝の詩人の栄冠を授けられた。(注2)

18世紀も後半になると、女性の文学活動はますます盛んになっていった。

特に、小説のジャンルでの女性の活躍はめざましいものがあり、それらのなかで、ゾフィー・フォン・ラロッシュ (1731-1807) はずば抜けていた。彼女は、ドイツではじめて小説を書いた女性で、女性にも小説を書く能力があることを身をもって示した人物である。彼女の書いた書簡体小説「シュテルンハイム嬢物語」は、ゲーテにも賞賛され、当時すでに非常によく読まれたものであった。この小説のなかで彼女は「男性の付属物としてでなく、責任と決断力を備えた自律した存在としての新しい女性像を描いている。」<sup>(注3)</sup>

一方、女性たちの活発な文学活動に対する男性側からの締めつけもあらわになってきた。この時代にかかなりの数の婦人向けの雑誌が発行されはじめたが、これらの多くの雑誌の基調は保守的傾向が濃厚で、夫に従順な女性を教育すべく、謙虚、忍耐、貞潔、ほどほどの教養が、望ましい女性の特性として誉めそやすことに、専ら力を傾けていた。それどころか女性の読書や博識は流行を追う愚かな行為として中傷されさえしはじめたのだ。

### 3.

さて、理性と悟性万能の啓蒙主義のあと、その反動として、個性と情熱とを謳歌するシュトウルム・ウント・ドラングの激しい流れが起った。しかし、シュトウルム・ウント・ドラングの白熱した自我感情の燃焼は長つづきする性質のものではなく、あふれる生命力を調整し、浄化する客観的規正を必要とした。これを成しとげたのが、ゲーテとシラーとによる古典主義であった。かれらの信奉するものは、理性的なフランス古典主義に代って、非合理性を含んだシェクスピア演劇であり、「自然に帰れ」と知性偏重を激しく批判したルソーらであった。

しかし、女性解放という観点からみると、シュトウルム・ウント・ドラングも古典主義も、新しい女性像を造り出してはいない。それどころか、

自ら獲得したものを女性にもひろげようとはせず、かれらの女性観は旧態依然たるものだった。

特に、ルソーの教育論の後世に対する影響力は甚大で、19世紀の婦人運動は、常にこれと対決していかねばならなかったのであった。ルソーは、彼の教育論を「エミール」において展開している。「社会と接触する以前の子供のうちに存在すると信じた自然的無垢を保つために、エミールは18世紀フランス社会の退廃的影響から切り離され、家庭教師によって孤立のなかで教育される。絶えず慎重に配慮することによって、悪徳（社会の産物であるところの）が子供に及ぶのを防ぐことができ、また一方で子供が自然から受けとった身体的、知的才能が、その子の受容力に完全に一致するまで発展せられるようになる。その結果子供は、偏見や誤謬から自由で適応可能な、独立的で人道的なひとりの若者となり、構成員としての資格において平等となるべき人類の一員となる。」<sup>(注4)</sup>こうした理想的な教育を施されたエミールは、成熟に達して適切でふさわしい伴侶を必要とする。それ故、ルソーは相当する女性、ソフィーを彼に与える。ところが女性に関しては、ルソーは類似の教育を与えていない。ソフィーへの教育は、彼女が生き続けるのに必要な男性へのきたるべき自然的依存を彼女に覚悟させるために、依存と束縛とを強調するのである。ルソーは、女性の教育は男性のためになるよう行われねばならない、男性に気に入られること、役に立つこと、愛され大切にされること等々が、女性の義務であると説く。こと女性の問題に関しては、ルソーは伝統的であり、保守的であったのだ。

#### 4.

18世紀末から19世紀初頭に活躍したロマン派の作家たちは、伝統的な結婚観とその土台となっている女性像に批判的であった。特にフリードリッヒ・シュレーゲルは、1795年に出版された「ディオティーマに関して」という論文

のなかで、ルソーによって代表されている女性の精神面での劣等性に関するテーゼが誤っていることを証明しようとした。「サッフオーやギリシャの女流詩人たちの例が、女性には真の感激と高等な芸術能力が全く欠けているというルソーの極めて能弁に弁じたてられた見解に反している。」<sup>(注5)</sup>またシュレーゲルは、女性の使命と教育についても、男女の区別なく、両性の使命は一つであること、公的な教育が女性にも適用されることに賛意を表わしている。そもそもシュレーゲルは、性差を両極端に分極化する考え方そのものに違和感を感じるタイプであった。「我々の時代の道徳や見解や芸術にさえも優勢を占めているごてごて飾りたてられた女らしさより醜いものがあるろうか、同様に度がすぎた男らしさよりむかむかするものがあるろうか。」<sup>(注6)</sup>

さらに「ルチンデ」や「最高に素晴らしい状況に関しての熱狂的な幻想曲」において、愛と結婚に関しての彼の体験と考えが披瀝されている。当時の一般の結婚観に反対して、愛のない結婚を批判し、愛と結婚は切り離せないという見解にたっている。女性の愛の力を高く評価し、対等の女性との恋愛のなかで、最も奔放な感能性から精神性の最高の極みまでの人間性のあらゆる階梯を踏破しようとするのである。<sup>(注7)</sup>一つになるということは、彼の場合には象徴的な意味を含んでいて、それは完成された人間性への成就の寓意なのであった。

こうした彼の女性観は、すぐれた女性たち、つまり彼の妻となったドロテーア・ファイトや、兄アウグストの妻のカロリーネ・シュレーゲル・シェリング（シェリングとつくのは彼女は後に夫と別れて、夫の友人の哲学者シェリングと再々婚したから）らとの交際から得たものだった。しかし、女性の自律と平等を主張するシュレーゲルの見解は、愛の関係に限られていて、女性の社会的な役割に関しては彼の念頭にはなかった。しかも後年彼の活動がだんだん社会化していくなかで、それに反比例するように彼の思想は保守化していき、従って女性観も変質していったのだ。

この当時大都会では、教養ある女性たちによって社交の場として「サロン」が開かれ、そこは当代の第一級の寵児たちのたまり場となった。これらのなかで特に有名なのは、ベルリンのヘンリエッテ・ヘルツ(1764-1847)とラーエル・ファルンハーゲン(1771-1833)のサロンだった。彼女たちのサロンを支配した精神について、ヘンリエッテ・ヘルツは次のように述べている。

「ここには伝統、すなわち世代から世代へと伝わってゆく、時代の精神や知識と歩調を揃える教養が媒介するものはいっさいないが、反面またかかる教養過程から生じる偏見もない。この精神のあらわれは伝統的形式を越えていて、豊かで自負に充ちており……その精神をおびる婦人たちは非常に独創的で非常に力強く、非常に辛辣で非常に刺激的であり、しばしば驚くべきほど深い流動性をもっている。この精神が最高に花開いた場合がラーエル・レーヴィン(ファルンハーゲンの旧姓)である。」この言葉はヘンリエッテ・ヘルツ自信にもあてはまる。まさしくヘンリエッテ・ヘルツとラーエル・ファルンハーゲンこそは、彼女らのサロンの精神を通して幾世代かにわたりドイツの哲学、文学および婦人解放に少なからぬ影響をもった女性であった。(注8)

シュレーゲル兄弟も彼女たちのサロンに出入りしていて、ヘンリエッテ・ヘルツの周辺にいたドロテーア・ファイトやカロリーネと知り合い結婚に至ったのだった。

こうした女性たちの書き残した書簡や著述が、彼女たちの自由な意識を伝えていて、こうした書き残されたものからも彼女たちの精神と考えが後世へと確実に受け継がれていったのだ。

ここで、婦人運動の先駆者という点で、二人の女性教育者を挙げねばなるまい。それはアマーリエ・ホルスト(1758-1829)とベッティ・グラム(1781-1827)の二人である。

彼女たちは、啓蒙主義のいう「人間」とは「男性」のことであり、人權の要求は男性のみに与えられた権利であって、人類の半分である女性は度外視されていることを看破し、両性の平等を主張する。そのために、二人は教育の機会均等を要求している。特にグライムは、ブレーメンで長い間女学校を経営していただけに、当時の女性の社会的地位の低さを熟知していて、養ってもらうためだけの結婚や、或いは未婚のままに親類に身をよせざるを得ない肩身の狭さ、こうしたみじめな非人間的な状況から脱け出すためにも、女子にも職業教育を与えるようにと強く主張しつづけた。

## 5.

1814年ナポレオンが没落すると、ヨーロッパは国際的無秩序状態におちいった。この混乱を取捨するために、ナポレオン打倒に大きな役割をはたしたプロシア、オーストリア、ロシア、イギリスの四国は新しい国際秩序の樹立を求めてウィーン会議を開いた。世界政策の追求に火花を散らすロシアとイギリス、両勢力の均衡の上で、オーストリア宰相メッテルニッヒの活躍の余地が多に残されていた。結局会議はメッテルニッヒの復古反動的傾向で締結され、ドイツに関してはオーストリア、プロシア以下の35の君主国、および4自由都市がドイツ連邦を組織し、フランクフルトに連邦議会を設けて、オーストリアが議長となった。この重苦しい沈滞したメッテルニッヒの復古反動体制の時代に、女性の状況と意識は極端に二極に分化する傾向にあった。一方では、旧態依然と糸車をまわし、黙々と子を産み育て、家を守る婦人たち、他方では、こうした婦人像をつっぱねて、自由と平等の原理を信奉して闘う女性たち、とであった。サンシモン主義や、ジョルジュ・サンドのようなエキセントリックな女性の出現も大きな刺激となった。

この時代、つまり1830年代から40年代に書きはじめた女性たちに、ルイー



ゼ・ミュールバッハ、ファニー・レーヴァルト、イーダ・ハーンハーン、ルイーゼ・アストン、ルイーゼ・ディートマル、ルイーゼ・オットーペーターズらがいる。(注10)彼女たちの小説のテーマは女子の教育に関してであり、因襲的結婚への批判であった。この彼女らの批判精神がやがて、1848年の3月革命期の自由と民主主義を求める運動に合流して、政治的行動をとって、社会の前面に登場するようになるのである。

「彼女たちの小説の大部分は、恋愛による結びつきと強要された結びつき、自発的な諦めとしかたのない諦め、或いは離婚と再婚といったモチーフをめぐっている。これらのなかに女性たちのありふれた、つまらないおしゃべり以外の何もかもみないならば、歴史的背景を忘れていているというものだ。というのは、ここでは色事の華麗さが問題なのではなく、女性一般の実存の問いかけがなされているのであり、人類の半分である女性が一生涯道具として卑しめられるのを、どの程度まで阻止できるかという問いかけがなされているのである。」(注11)

これらの女性作家たちの時代では、女性の運命は家父長制の社会構造によって決められていて、彼女たちはそれぞれの個別の生き方は許されていなかったのだ。ボーヴォワールの有名な言葉にあるように、「人は女に生まれない。女になるのだ。」彼女たちの書いたものは、男性からみるとつまらないものとうつつるかもしれない。しかし、彼女たちは必死に女にされることに反抗し、啓蒙思想の人権の要求を女性にも拡張するようにと反乱を起こしているのである。従って、彼女たち自身、或いは彼女たちの小説の主人公は、社会的に決められた女性の道を逸脱して、個性と自律への道を模索するのである。

これらの女流作家たちのなかで最も有名なのは、イーダ・ハーンハーン(1805-80)である。彼女はメクレンブルクの田舎貴族の生れで、伝統的な地主貴族階級としての女子教育を受けた後、21才で同じ階級の裕福ない

とこと結婚した。しかし、夫は暴力をもふるうような暴君であって、彼女はまもなくこの結婚が失敗であることに気づいた。諦め、耐え忍ぶことがまんのできない彼女は、長い離婚訴訟を経たのち、自由の身となった。この結婚と離婚の極めて個人的な経験が、彼女の場合男女平等と同権の要求の出発点となった。以後、彼女は一見、情熱的で、華麗な恋愛遍歴の生涯を送るのであるが、それは同時に家父長制への反抗の証でもあったのだ。彼女の書いた数多い小説のなかで特に有名な「伯爵夫人ファウスティーネ」のなかでも、一般男性の望むような女性像を拒ねつけて自律した新しい女性像を作りあげている。ファウスティーネとは、語源からみるとファウストの女性形であって、題名からしてすでに、ゲーテの「ファウスト」を十分に意識していることがわかる。ゲーテのファウストが自我の飽くなき拡大を目指して努力していったように、ファウスティーネも自我に忠実に生きるのである。

ルイーゼ・アストン（1814-71）も社会のいろいろの偏見と戦った一人である。<sup>(注12)</sup>彼女は17才の時、両親の強い要求に屈して、中年の英国人の工場経営者サムエル・アストンと結婚した。が、1845年離婚して、ベルリンの三月革命前の政治運動のサークルに加わった。結婚と宗教に対する辛辣な批判、それに加えて公然とたばこを吸ったり、ズボンを着用するという破廉恥な行動によって、彼女は1846年ベルリン追放の処分をうけた。この処置に対して彼女は「私の女性解放と追放と弁明」という著述を表わして声高かに自己弁護をした。1848年3月革命が起きると直ちにベルリンに舞い戻り、政治新聞「義勇兵」を編集した。しかし革命の挫折後再び追放され、新聞も発行禁止された。が、それでもなお1850年「義勇兵」のなかの政治的な、女性解放の詩を集め発行したり、また、「革命と反革命」という作品のなかでは、自由と民主主義のために闘う行動的な新しいタイプの女性像を創造したりして活躍を続けていたが、徐々に締めつけを強めてきた

当局の弾圧に、遂に沈黙させられていった。

さて、女性解放運動への大きな前進は、ルイーゼ・オットーペータース（1819—95）によってなされた。<sup>(注13)</sup>彼女は同時代の人たちからすでに「ドイツ女性運動のひばり」といわれていた。彼女は進歩的な考えをもつ市民階級の生まれで、マイセンの裁判長であった父は政治的な事件について常に妻や4人の娘たちと議論しようという家風のなかで育った。1840年ザクセンのエルツ山系を訪れたときに見た劣悪な生活条件下で働く労働者たちの姿にショックを受け、彼女は社会派作家になったのである。そして「祖国新聞」の同人となって、時代の諸問題や女性の権利について、オットー・シュテルンという男名で投稿していた。当時女性がそのような問題について書くということは、まだ、ふつうのことではなかったのだ。1847年には女性運動の綱領を起草し、そのなかで女性のためにもっと良い教育と教養を要求し、女子労働者協会と教養協会を創設し、1849年に「ドイツ婦人新聞」を発行している。彼女は女性も社会的な生活と政治的出来事に参加するよう呼びかけると同時に、女性の経済的自律のために女性にもっと多くの労働の機会を与えるよう要求している。しかし、革命挫折後は転々と町々を追われ、彼女の新聞も押収され、活動を狭められていくことを余儀なくされたのであった。

女性解放の分野では、ファニー・レーヴァルト（1811—89）も忘れてはならない存在である。<sup>(注14)</sup>彼女は「自叙伝」のなかで、当時の市民階級の娘たちの日常生活の状況についての貴重な記録を残してくれている。ケーニツヒスベルクの比較的裕福な商人の家に生まれた彼女は、その階級に通例の高等女学校までの教育を受け、14才で卒業した。その後の彼女の少女時代は、ただひたすら結婚までのいわば待ち時間であって、父親の決めた日課に従って、毎日毎日単調な生活の繰り返しだった。その日課というのは例えば、次の如くであった。月曜日午前中、1時間のピアノの練習と3時間

の裁縫の時間、さらにもう1時間すでに隈々までそらんじている古い教科書のおさらいをしてから昼食、午後は再び2時間半裁縫、1時間ピアノのレッスン、さらにもう1時間習字の時間をこなし一日が終る、という具合だった。生来向学心にみちていた彼女は、この未来を閉ざされた死ぬほど退屈な生活に苦しみ、ギムナジウムへ通う兄弟を羨ましく思い、学校へ行きたいという憧れと同時に、できれば教師になって一生涯の職業を持ちたいという願望を強く抱いていた。が、それは叶えられない願望だった。当時の中産階級の娘たちは物質的に恵まれた結婚を最終目的としてこのように教育されていたのだが、実は娘たちの運命は偶然に委ねられているにすぎなかったのだ。つまり男を魅きつけて結婚へ至らせられるかどうかは全く保証されていなかったのであるから。無職の状況で、ただひたすら結婚を待っている状況というのは、女性の性格を卑しめて、男性に媚びる女、卑屈な女を作ると彼女は考える。それ故に、自分の少女時代の体験から、女性の自律と人間としての尊厳を守るためにはまず男女平等の教育と女性にも職業につく権利を与えることの必要性を彼女は訴えつづけたのである。

女性解放運動が再び息をふき返してきたのは1860年代になってからで、再びルイーゼ・オットーペータースやファニー・レーヴァルトらによってなされたのであった。オットーペータースは1865年ライプツィヒで開かれた最初の婦人会議に参加して、「全ドイツ婦人連盟」を創設した。この会は1933年まで続き、上部連盟としていろいろの異った考えをもつ下部の諸団体をまとめていき、市民階級の女性運動の受け皿としての役目を果たしていた。しかし、一つの統一した連盟であらゆる女性問題を処理するにはかなりの無理があった。つまり、ドイツは階級社会であり、貴族階級、市民階級、労働者階級、それぞれの立場によって状況は異なり、従ってそれぞれ異なった戦術をとらざるを得ない場合も多かったからである。

例えば、貴族階級の女性はかなり自立した立場にあり、身分も保証され

ていた。離婚の場合にも慰謝料がもらえたり、未婚の女性も家族からの扶養の権利を保持していた。

それに反して、市民階級の女性の場合は完全な依存状態にあった。家父長制が最もしっかりと根づいている階級であったので、夫は絶対的権力をもっていた。財布は家長が握っていて、妻には独自の収入のすべもなく、経済的に完全に夫に依存していたばかりでなく、妻の毎日の日課も夫によって決められていて、行動の自由もままならない状態だった。子供たちの将来も家長によって決められ、女の子はおうおうにして経済的条件のみで結婚が決められるという状況だった。このような絶対的権力を握っていた一家の長への依存から脱け出るためには、経済的な自律が先決と考えられた。それ故に市民階級の女性たちは、労働の権利、つまり就業の権利を要求した。

一方、労働者階級の女性はすでに労働に従事していて、夫に対する経済的依存は少なかった。というのは、家長の賃金収入だけでは家族を養っていけず、妻や子供も働かねばならない状況だったからである。彼女たちは、男たちと同様に過酷な労働条件のもとで働かざるをえないうえに、家へ帰れば家事や子供の世話が待っており、三重の労働で金縛りの状況だった。それ故に、彼女たちの要求は、この三重の労働からの解放だった。

このように掲げる要求の差異がだんだん大きくなっていき、やがて市民階級の婦人運動と労働者階級から生れた社会主義の婦人運動とは、たもとを分かちあうようになるが、ともかくも第一次大戦前までは、婦人運動の組織化のなかで、未組織の婦人たちの意識形成に力を貸したり、女性の社会状況の改善や法的身分の改善を実現したり、或いは大学教育への道や社会的評価の高い職業への就業の道を開いたりして、婦人運動は女性解放の拠点としての役目を果たしてきたのであった。

注

- 注1 Hansjürgen Blinn : Die Diskussion um den Status der Frau vom 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart. in Emanzipation und Literatur. Hrsg. Hansjürgen Blinn. Fischer Taschenbuch Verlag. 1984, s. 25-26 ;  
Gisela Brinker-Gabler : Deutsche Dichterinnen vom 16. Jahrhundert bis zur Gegenwart. Fischer Taschenbuch Verlag. 1978, s. 113-119
- 注2 Blinn : Diskussion〔注1〕s.27 ;  
Brinker-Gabler : Dichterinnen〔注1〕s. 121-127
- 注3 Blinn : Diskussion〔注1〕s. 28
- 注4 モーリス・ブロック／ジーン・H・ブロック 中村秀一訳：女性と自然の弁証法。18世紀フランス思想・ルソーを中心に現代思想1。1985, Vol. 13-1青土社。s. 167-181
- 注5 Friedrich von Schlegel : Über die Diotima. in Emanzipation〔注1〕s. 145
- 注6 Schlegel : Diotima〔注5〕s. 145
- 注7 Friedrich von Schlegel : Dithyrambische Fantasie über die schönste Situation. in Emanzipation〔注1〕s. 226
- 注8 菊盛英夫：文芸サロン。中公新書。1979, s. 169-170
- 注9 Blinn : Diskussion〔注1〕s. 46-47
- 注10 Ebd, s. 51
- 注11 Renate Möhrmann : Die andere Frau. Emanzipationsansätze deutscher Schriftstellerinnen im Vorfeld der Achtundvierziger-Revolution. Stuttgart. 1977, s.64
- 注12 Blinn : Diskussion〔注1〕s. 53 ;  
Brinker-Gabler : Dichterinnen〔注1〕s. 197
- 注13 Blinn : Diskussion〔注1〕s. 55 ;  
Brinker-Gabler : Dichterinnen〔注1〕s. 207
- 注14 Blinn : Diskussion〔注1〕s. 49 ;  
Möhrmann : Die andere Frau〔注11〕s. 118-129